

和紙の起原と讃岐

兒 玉 洋 一

- 一、和紙の起原と其の概観
- 二、特に檀紙に就いて
- 三、近世讃岐の和紙
- 四、明治初期の高松手漉
- 五、餘論 製紙技術の發展概観

一、和紙の起原と其の概観

紙の漉觴は歐洲に非ずして支那に起り、大東亞文明史の一頁を飾れるは興味ある史實である。即ち世界史上初めて製紙法が案出せられ、それが實用に供せられたるは、支那に於て後漢和帝の時代¹⁾（皇國では景行天皇の御代西紀一〇五年頃）蔡倫が始めて樹膚又は敝布・魚網を煮爛して紙を漉き、蔡倫紙と名付けしに始まると思はれるが、かゝる支那製紙法が、一方西歴七五〇年頃ベルシヤ・アラビア・エヂプト等を経て歐羅巴諸國に傳はり、他方我國には推古天皇の十八年に三韓を経て傳播されしものと謂はれる。

註一 張天榮「蔡侯殿記」に従ふと、「浙江省杭州湖墅鎮には中華民國杭州紙行公會同人によつて民國四年に建設せられた蔡倫殿があり、其の内側には蔡侯の像があり、正殿上の匾額「漢龍亭侯傳略」には、要略次の如く、「蔡侯諱は倫、字は敬仲、桂陽の人也。永平の末（後漢明帝）宮掖に給事す。元永元年（和帝）秘劍及諸器械を監作す、精密にして後世の法と爲らざるもの莫し。書契に至りて

は、古より多く編むに竹簡を以てす。其縑帛を用ふる者は之を謂て紙と爲す。縑は貴く而して簡は重く、人に便ならず。侯廼ち意を造し、縑膚、麻頭、魚網及弊布を用ひ以て紙を造る。元興元年（和帝）之を奏上す、帝其能を善みし、是より従用せられざる莫し。故に天下咸な蔡侯紙と稱す」とある。（『紙業雜誌二十一卷一號所收、張天榮「蔡侯殿記」參看」）

論者によつて屢々引用せられる日本書紀には所謂推古天皇の十八年に「春三月高麗王貢上疊微法定疊微知五經且能作彩色及紙墨併造礪磑」²⁾とあるが、佐藤信淵は其の著「經濟要錄」卷之十開物中篇に於て、諸紙の事に觸れ、古語拾遺の説を引用して「皇國にて紙を漉き初めし事實をば、我れ未だ此れを審にせず、然りと雖も古語拾遺の岩戸隠れの條に天日鷲神穀木を種て白和幣を作らしむるの事あるを按るに、穀木は即ち楮樹のことにして、古は此木の白皮を木綿と名けて白和衣の神衣を織たる者なれば、紙を漉出せしも此時代を距ること遠かるまじく思はる也。又日本書紀、推古天皇の十八年に、高麗國王より疊微と云へる僧を貢し、此僧能く紙墨を作ること載す、或は此時を以て紙を製するの原始とす、然れども當時皇國の極て隆盛なりしを按ずるに、此より以前は絶て紙筆の無かりし由にも非ざれば、紙は必ず神世より有りし者なるべし」³⁾とて、製紙法は更に遡つて既に神代より存せし事を肯定してゐる。尙論を進めて、「皇國にて紙に名くるに神を以てするも、神幣に造るべき者なるが故なるかも知るべからず、彼れ此れを合せ考るに、紙も亦蠶及び麻と同等の物にして、其基原は神の漉初給ひしなるべきを察するに足れり、上古の論は先づ置て、中世に奥州より檀紙を夥しく産出し、京都に於ては陸奥紙と稱して甚だ此れを珍重せしこと榮花物語に見えたり」⁴⁾と云ひ一家の見を樹て、紙の語原に神を宛て紙が上代より蠶及び麻と同等の重要性を持ちし事を強調し、中世に至つては檀紙が奥州地方に極めて多く産出し、京都地方にて珍重せられし由來を述べて遺憾がない。農政學者としてのかゝる信淵の見解は、また經濟史的觀點よりしても一卓見と稱すべきである。

晉の穆帝の時代に王羲之が蘭亭の記を日本製の繭紙に書いたといふ事は古へより有名なる逸話として傳へられてゐる

が、もし事實とすれば、推古朝より二百年も以前に、我國に製紙法が行はれて居た事となる。⁵⁾ たゞ謂ふ所の藁紙なるものが果して今日の如き紙を意味するか、或は絹に類するものではなかつたか、それとも大和本草に推定せる如く陸奥紙であつたかは遽かに斷定し得るところではない。併しわれわれは紙の語原の探究から推しても、穀をカウソといひ、楮又は栲の樹皮を以て神衣を織りたりとする神衣説^{註一}には、谷川上清の書見説^{註二}(倭訓)や太槻博士の簡字説^{註三}(大言)よりも、傾聴すべき多くの理由をもつてゐると考へる。

註一 神衣説に就いて二つの注意すべき點が考へられる。即ち其の一は太古の服飾に就いてある。太古の衣服が何であつたか、それは人類學的にも、比較土俗學的にも初めは獸皮鳥毛(稀れには魚皮)であつたことが推測される。古語拾遺に我國の衣服は天長白羽命が創製したもので衣服を長白羽といつたのは之に原因すると記してゐるが、この白羽が鳥毛であつたらうと思はれる、と共に更にこの長白羽命が我國に紙の原料である楮及び栲を始めて將來した天宮命の系統に屬してゐることは見逃してはならない。栲衾の語は楮と共に朝鮮語のタクから來たものといはれ、元來同義語と呼ばれるが、栲で製した衣服や夜具が漸次に獸皮や羽毛に代用されたことが知られるのである。更に神衣が紙と同じく楮または栲から製せられることを知つたならば、紙の語源が神衣の轉訛であることも併せ知りうるのである。

其の二は紙が神聖なものとして一種の宗教的信仰の對象となつた例は此の語源説の旁證として有力なるものである。支那では紙を尙卿と稱したことは婦孺説に載せてあるといふ。更に滿洲源語考に據れば、山海經曰、「肅慎之國有櫛、名曰雄帝、中國有聖帝代立、即此本生皮可衣也」とある。肅慎に産するこの神木雄帝は白鳥博士の考證によれば滿洲語の罄山、女真語の好沙と同じく紙なりといふことである。即ち肅慎や滿洲に於ても紙を衣服として常用する者は社會の支配權を神的に有した神祇と物的にしてゐた帝王であることが知られるのである。従つてタクの語で呼ばれた語がカウソと呼びかへられたのは、此の楮から製せられた紙をカミと呼ぶ大古民族の醇朴な信仰から來て居ることが肯かれるのである。且又我國上古の製紙所が主として神社であり、而も之に従事するものが神人の徒であつた事も大いに注意すべき點である。

註二 「紙は舊見の義なるべし本朝にて紙を造る始は推古紀に見えたり色紙檀紙縹紙屋紙河苔紙斐薄紙等の名ある事倭名鈔に見えたり麻紙朝野群載に見ゆ我邦の紙を異朝に稱せし事まゝ見えたり唐玄宗の時に多く書を集め日本國の紙に書し事松窓雜錄に見ゆ○紙に幾張と

いふ事唐式に見えたり舶來の品に竹紙藤紙は漢名なり馬糞紙は草紙なり○紙裏の字西土の書にも見ゆ○西洋紙は利諾といふものを布とし徹れは搗て紙とす極て堅韌といへり○紙すく事を天工開物に殺青といへり○かむといへハ尊ふ詞にてかみといへハ實事也對増補語林「倭訓栞」上、五三九頁。屋代弘賢は古今要覽稿の釋名の部に「按に和訓栞云、書見の義なるべしと、此說非なり、これは筆をふみての中略なりといへるよりして紙をしかいへるならんが、筆の名義とは自ら異にして、書見の略とは更におもはれぬなり」と言つてゐる。白石はその著東雅に於て神衣説を採りながら尙ほ簡字説に耳を傾むけてゐる。

註三 大槻博士「大言海」に従ふと次の如くある。紙カミ（簡ノ字音ノ、かぬ、かに、なみト轉ジタルナリ、爾雅、釋器、疏「簡、竹簡也、古未レ有レ紙、載ニ文干レ簡、謂ニ之簡札」推古天皇ノ御世ニ、高僧、來朝シテ始メテ紙ヲ造レリ、貞丈雜記九ノ書札ノ條ニ、手紙ハ手簡ヲてかんト讀ミ又てがみト讀ミタガヘタルナルベシト云へり）大槻文彦「大言海」一ノ六九二頁。

斯かる見解よりすれば、本邦に於ける製紙術も亦極めて古きものたるを思はせるが、たゞ我が國民性として清潔なものを尊ぶ故、敝布・魚網の如き不淨の原料は用ひず、また上代人は正直で互に言行を尊びし故、記録の必要性が尠かつた爲でもあらう。現存の實物資料より推せば古紙は奈良朝のものが最古で、それ以前の實證材料はなく、聖德太子が疊徴と共に抄かれた紙も布帛の類とは異り恐らく楮紙であつたらう。「文藝類纂」の著者も「我が古紙は其質堅實にして、今世所謂はしきらずの如き横紋あるは抄ける時の靡跡なるべし、其色茶褐色にして黄を帯びたるは潢紙の年を経しものなるべし。而して之を卷くカミと細くカミ（寶龜元年三月百萬塔に納め）上下二寸に滿たざるを以て之を展べて手を離せば既時に再び卷局す、是れ千歳を納れども堅硬なるを以てなり。按ずるに是れ楮皮紙至古なるものなるべし、楮を以て造るは蓋し此時に先だちて創製せしなるべし、その後延喜式に至りて麻紙・斐紙・穀紙等を載す。その製造法もはゞ見るべし」としてをるが、更に聖皇本記には『太子（聖德太子）は疊徴と共に紙を造る、是より先未だ楮紙を造らず、麻を引きて之を書き、縑を節して簡となせり、漸やく豊明宮（應神天皇）の代より三韓紙を召して之を用ふ。今疊徴が製する處の紙は經を書くに好しと雖も、性弱くして強當に堪へず、蟲好んで食ひ久じきに堪へず、仍て太子楮紙を製し遂に雲紙・縮印紙・白柔紙・俗薄紙の

四種を造り、楮を邑州に植ゑしめ、紙の製法を以て國縣人に教ふ⁷⁾とある。此の書はまた後世の偽作とも謂はれるが、偽書は偽書としての存在價值もあるべく、疊微の耐久性乏しき和紙に、非常なる工夫を加味されて、遂に灰を以て楮皮を煮る事、及び之に特殊の「ネリ」を加へて漉ぐ事を發見されたのは聖德太子であり⁸⁾、此の方法は千數百年後の今日にも傳承せられ洋紙とは趣を異にする日本紙の特徴を發揮してゐるのである。推古帝の即位以後九十餘年、持統天皇の朱雀三年には令二十二卷が諸國に分たれて居るが、其の令の義解によれば『造紙手四人、雜紙を造るを掌る』とあり、此の頃には既に専門の抄工が現れてゐたのであらう。孝謙天皇の御代になると種々の優れた紙が多量に製せられたやうである。正倉院に保存されてゐる古紙は専らこの時代に抄造されたものである。更に醍醐天皇の御代になれる圖書寮式には、『凡そ年料造る所の紙二萬張』とあり、御所の直轄で抄造した紙の種類、原料である麻、穀皮、斐皮、藁などから、紙漉槽・洗麻槽・淋灰槽・乾板の寸法まで詳細に規定してある。更に其の頃楮と共に麻も重要な製紙原料であつたに違ひないが、麻紙の起源に就いては知る由もなく、たゞ二つの原料が、白和幣・青和幣となつてほゞ同時代に紙に抄かれたと類推するの外はない。

延喜式は我が國紙史研究の極めて貴重な資料であるが、當時諸國から貢進せる紙或は紙料並に抄紙用具、或は長・中・に分つた造紙工の一日の工程まで規定せられてをり、諸國から貢進せる紙や原料に就いても、阿波國紙麻七十斤、讃岐國斐紙麻百斤、伊豫國斐紙麻百斤などが見られ、既に此の頃の我が國紙業の地方化が窺はれる⁹⁾。當時の我が國の製紙業は主として宮廷直轄の事業であつたと考へられるが、平安朝になると紙屋敷を工場として宮廷、諸官省、貴族等の需要する紙を抄いて居たが大同三年に至り『年料造紙、其數不多、所有紙手、既無食料』との理由から八人の造紙手を五人に減らし、造紙長上二人を一人に減じたのは、宮廷に芽生えた製紙業が地方へ發展し、貢進の紙が増加せる結果、宮廷自ら造紙の必要が少くなつたせゐであらう。正倉院文書などに據ると各地方から各種の紙が產出されたものと思はれ、麻紙、斐紙の外

に、竹幕紙、布紙、檀紙、葉藥紙、杜中紙（比佐木紙）胡桃紙などがあり、紙質を堅くする薬が當時既に一種の原料として使用された事も分り、竹幕や胡桃などの珍しい原料も巧みに處理されたのであらう。奈良朝に於ける寫經と造紙の進歩とは深き關係があり、その必要から寫經紙料の需要も多量に上り、更に寫經料紙の蟲害を防ぐ爲に料紙を黄藥で染める事すら行はれた¹⁰⁾。黄藥一斤を以て料紙三十張乃至四十張を染めた事が傳はつてをり、黄麻紙として今に残つてゐる經文は總て此の藥品で染めた麻紙であるといはれ、橡の汁で染めた紙は主として經卷の表紙に使用したものである。

和紙製法の珍本「紙漉重寶記¹¹⁾」は寛政十^{戊午}四年四月、國東治兵衛の撰になり、浪華の書林、大野木市兵衛・海部屋勘兵衛により發刊されたものであるが、その序文に紙漉業の賤しからずして、耕作の餘暇に女子も之を製して國益とすべきを述べ、更に謔言に

『慶雲和銅の頃柿本人麻呂石見の國の守護たりしとき民をして此製を教へ漉しむるより此職をこの地に傳ふ事久しされハ周防の山口大内氏代々相傳して和漢通路の名家たりよつて本朝の紙上品なる事をしつた唐土よりは是を乞ふ大内氏これを許諾し石長防の三筋におしへ是を漉しめ彼地へ渡すにより大に悦び是を賞せし事書に傳へて詳なり唐土の製は今の唐紙の類なり』

とあり、日本より支那への輸出事實に觸れ、本文には、人麻呂の像・眞椿宇之圖・冬椿宇茹とる圖・椿宇賣買之事・椿宇むしの圖・同うハをむく圖・椿宇う波干之圖・同賣買之事・同皮を漬置く圖・同うす皮を削圖・同阿く出しの圖・椿宇煮たきの圖・椿宇再阿らふ圖・と路ろ草の種類・椿宇擲く圖・擲棒之圖・半紙漉之圖、道具之圖等を掲げて夫々説明文を附加してゐる。

上來既に述べたる如く概観して、上代より中世にかけての和紙は椿・麻等を原料とする椿紙・麻紙であつたが、次いで斐を原料とする斐紙が現れた。延喜式には紙の原料としての斐皮を諸國から貢進せしめてゐるが¹²⁾、「倭訓栞」に従入ば斐は「がんび」であり、中世和紙の主要原料は依然とて靱皮纖維であつて、専ら手漉法によつて發達し來つたものと思

はれる。而して讃岐には檀紙・紙漉なる地名を現在香川郡に存してをり、之等は先づ以て紙と深き關係あるものと思惟せられ、有力なる研究對象となるのである。製紙の由來大要斯くの如く、本邦に於ける紙の種類も亦極めて雑多なものとなつてゐる。^{註一}

註一 現今では和紙と洋紙の區別さへ不明瞭であるが、原料關係より木材パルプを五〇%以上は洋紙、然らざるものは和紙と區別したり、或は製造方法により抄紙機で長網を使用するものを洋紙、丸網を使用するものを和紙と區別したりしてゐる。併し、何れも正確な區別方法ではなく、寧ろ公定價格で和紙・洋紙と規格が限定されてゐるから、それに従うがよいとする論者もある。和紙のみに就いてもその名稱 分類は非常に複雑し、洋紙の如く組織的な分類は甚だ困難となるが、いまその大槪を示せば次の如く考へられよう¹³⁾。

- (一) 檀紙類(諸儀式用檀紙)
- (二) 奉書類(包飾、文書用)
- (三) 杉原、丈長、糊入類(包飾、折掛用紙)
- (四) 小杉並に延紙、小半紙、鼻紙類(懷中紙、薄紙類)
- (五) 美濃直紙類(書院、美濃紙類)
- (六) 諸國厚紙並に仙貨類(厚紙)
- (七) 中折、清帳、大手紙類(辭令、封筒紙)
- (八) 板紙類(生漉及漉色類)
- (九) 雜紙類(揮毫用紙類)
- (十) 諸國半切紙類(半切紙類)
- (十一) 鳥の子紙類(雁皮、間合紙、襖紙)
- (十二) 諸國半紙並に漉紙類(半紙)

二、特に檀紙に就いて

紙は既に奈良朝時代に存在し、平安朝以降屢々書狀または贈物の包紙等に用ひられ、又引合と稱して男女の縁を結ぶときに用ひられたと謂はれる。武家時代に入つては知行目録等にも盛んに用ひられた。前掲既に佐藤信淵の指摘せる如く、此の紙は上代より中世にかけて陸奥國の特産たりしものといはれ、萬葉にも「みちのくのまゆみのかみ」などあるが如く、^(註一)「まゆみ」(檀)の皮を以て多く製せられたものであらう。^(註二)「まゆみ」の名は既に延長年間の撰になるといふ「倭名類聚抄」に現はれ、「御堂關白記」には長和五年七月十日の條に「沙金百兩、檀紙五十帖」とあつて資料としては最も古く、「水左記」の承暦三年四月二十六日の記が之に亞いでゐる。紙質は古來「厚肥えたる紙」「豊厚なる紙」と形容されてゐる如く、特有の皺がある。

註一 「みちのく」と「まゆみ」に就いては、萬葉集に夾の二つの和歌が見られるが、こゝにいふまゆみは弓の事であり、檀の木で作つた弓を意味するのであるから、此の時代に陸奥地方に檀が産したと考へられる。

みちのくのあだたらまゆみつらはけてひかばやひとのわをこなさむ

(卷七)

みちのくのあだたらまゆみはじきおきてせらしめきなばつらはがめかも

(卷十四)

註二 通説は檀の木の纖維から造れるものとするが、之に就いて反對説もある。例へば大澤忍博士は「和紙談叢」一號所載「檀紙考」に於て「別種の紙であらう。即ち、『秦皮の粘汁にて沙製した紙』なりといふ新説を發表せられ、壽岳文章氏も『和紙研究』四「源氏物語に見えてゐる紙」に於て通説に多くの疑問をさしはさまれる。其他「檀紙とは何である乎」(『紙業雜誌』第二十四卷四號評論)參看。

檀の産地としての陸奥と、「みちのくにかみ」の呼稱とあはせ考へて、上代より中世にかけての檀紙の有力なる産地として陸奥地方がしばしば指舉せられるが、『塵添陸奥抄』¹⁴七紙屋事には「源氏ニミテノク紙ト云ハ檀紙ノ事トナシ、檀紙ハ陸奥ヨリ始マリケル也俗ニ引合ト云ハ是也、男女ノ心ヲ通スニ筆ヲ盡シ、詞ヲカザリテ、染思色顯シ、積ル涙ヲ淵ヲ知セン志ヲ遂ル玉章サニ、此紙ヲ用ル故ニ引合ト申トカヤ、此檀紙ニ大小アリ、當時小キヲノミ引合ト云ト思フ人アリ」とあり、「更に文藝類纂」(七文具志)檀紙の項に「古の檀紙は、まゆみの紙の義なれば蓋衛矛類の皮にて造れるなるべし、

是まゆみの皮には、纖維多くして杜仲に木綿の名あるに協へるを以てなり、如此纖維ある者なれば、これを以て紙を抄き、仍りてこれを檀紙といひしなるべし。加茂保憲女集に、みちのくのまゆみのかみといひ、平安朝時代の地方の産物を記したる「新猿樂記」にも『陸奥駒^{又檀紙}』とあり、細流抄にも陸奥紙を檀紙なりといひ、河海抄^蓬陸奥國紙、檀帛也、陸奥より檀紙をすきはじむ、檀はマユミの木也、萬葉にみちのくのまゆみのかみとあり、又明星抄、陸奥にて創造すといふ源氏物語の厚肥えたるの文に據れば、即ち檀紙なるべきが如し。然れども方今、陸奥には、絶えて檀紙を産せず、且延喜主計式の諸國調に紙ありて、陸奥特に無し、後考を待つ¹⁵⁾とある。

いま「草木六部種法」に従へば、

「中古の世に奥州より夥しく檀紙を出せり、檀紙を陸奥紙といふにて知るべし、然るに近年に至りては奥州より檀紙の出るをきかず、不昧軒嘗て檀を作り、紙を漉きでみられしに紙性至つて上品にて、五色紙を製すればその色殊に美しく之を打ちて光澤鮮明なること美濃越前等の上紙と雖も絶えて及ぶべきところに非ずといはれけり。」

とあるが、少くとも近世に至つて檀紙と陸奥とは極めて縁うすきものとなつたのであらう。

次に檀紙と讃岐との關係であるが、

延喜式には「讃岐國別貢雜物、紙麻百五十斤、斐紙麻一百斤」と録され、藤原保則傳に「讃岐多紙、又有能書者」とあるが¹⁶⁾、小野晃嗣氏は更に、應永十五年以後二十八年以前に成立したと謂はれる「庭訓往來」¹⁷⁾などに「讃岐園座同檀紙」とあるにより、讃岐は此の時代にかけて園座とともに檀紙の著明なる産地であつたと肯定せられる¹⁸⁾。更に「園太曆」延文二年三月二十六日の條に「讃岐高檀紙十五枚」云々との記事を始め、「延文百首」¹⁹⁾、三條公忠(永徳三年十二月廿日薨)²⁰⁾の著「後押少路内府抄」並に今川了俊の²⁰⁾「今川了俊書札禮」等に讃岐檀紙或は讃岐高檀紙と散見するより庭訓往來の記事を實證するものとする²¹⁾。

註三 續群書類從所收、(第卅二輯上一九一—五頁)「後押小路内府抄」によると次の如くある。(傍點筆者)

「官途、歎狀事。麗シキ歎狀、假令端作ニ近衛大將所望事ナト書テ。奥禮節。某誠惶恐謹言。月日下加位署。是、直ノ奏聞狀ノ心地也。但宛所ハ傳奏職ナトノ名字也。料紙ハ讃岐、高、檀紙也。二三枚ニモ及ハ、續之書之。數枚綴タルモ端ノ一枚ノ加裏紙ヲ其上ニ又禮紙ヲ加也。文章モ書封句也。只是ニ不及之時ハ。消息申文ニモ普通ノ讃岐、檀、常ノ書也。」

上代末葉にその姿をあらはし、中世に入るに及んで公的資格を獲得するに至つたところの檀紙は更にその紙質・形態の大小等を異にする新種目の出現を見るに至つた。建永元年には、はやくも高檀紙の名稱を認めうるが²²⁾、これは從來の檀紙とは異なるものであることは、「園太曆」文和五年三月三日の條に「御製高檀紙ニ被遊了、中殿御會以前ハ普通檀紙候歟」とあるによつて明かである²³⁾。高檀紙は更にその後正長・永享・嘉吉の頃より小高・大高の別を生ずるに至り²⁴⁾、近世に入るに及んでは小高・大高は小鷹・大鷹とも書かれる風を生じ²⁵⁾、更に遅れてその中間に、中鷹の呼稱も現はれてゐる様であるが、中世にあつては、中鷹の名稱は見出し得ない。引合といふのも檀紙の一種と見られ、大引合・小引合といふも恐らく大高引合・小高引合の略稱と考へられよう。「雍州府志」^{上篇}に、「或號大高・小高、或稱引合、又謂引大小高、則紙大小之號也、引合此紙三屈折之、其體如引合衣領」とあると謂はれる²⁶⁾。而して、かゝる檀紙の中世に於ける有力なる產地として小野晃嗣氏は其の遺著「日本産業發達史の研究」に於いて、先づ讃岐の國を挙げ、其の製造年代に就いては應永或はそれ以前と限定される。即ち、氏に従へば²⁷⁾、

「讃岐香川郡には今日も猶圓座村・檀紙村の地名が現存してをり、且つ檀紙村には紙漉の字名もあつて、當時に於ける檀紙生産地としての名残を留めてゐる。上述の如く、應永の頃までは、檀紙の生産地は讃岐であつたがやがて備中が、讃岐にかはつて據頭するに至つた。即ち、應永以後に於ては讃岐檀紙の稱は全くそのあとを絶ち、爾後備中檀紙・備中引合・備中小高檀紙の名を諸書に見出すのである。」

とし、讃岐に於ける檀紙生産を應永以前に限定すると同時に其後斯業の備中に移れるを説かれる。併し乍ら地方誌書と傳承

に従へば、必ずしも應永年間に斯業の廢絶せしものとは云はず、寧ろ慶長・慶安の頃まで繼續せしもの、如く傳へられる。即ち、中山城山の全讀史卷之十二、産物志に従へば、讃岐の産物として海膽・海鼠腸・海參・鯛・鱒等の海産物、新米・大根・牛房等の農産物を擧げると同時に檀紙・圓座などの古來有名なる産物を掲げ、檀紙に就には、「香西郡飯田郷檀紙村に漉紙工人有り檀皮を以て紙漉す。名品なり、慶長年中に絶えたり²⁸⁾」として慶長頃の廢絶を主張する。讃岐名勝圖繪などにも檀紙村の項に「昔此村紙を漉き檀紙といふ村に名づく……慶長十年以降其事廢絶す、今尙紙漉池あり²⁹⁾」としてゐる。更に赤松景福氏は、其の著「讃岐名所歌集」に檀紙村を掲げて、「古の中間郷の内とす。今中間、檀紙、御厩三村を併せて檀紙村といふ。東は鷺田、一宮、西は山内、端岡、南は圓座、北は上笠居に界す。古昔此村檀紙を製せしを以て村名となる。慶安中に至り其製絶ゆ³⁰⁾」。として

漉く人の絶えて無けれど今も猶まゆみの紙を貢へる里の名

と詠み、更に紙洗池に繞いては檀紙村大字檀紙字中森に在ることを指摘し³¹⁾、「古紙漉し跡なり。村人之をカミアラヒイケといへどカミヌキノイケといふべし(洗もスキと訓む例あり)」とし、池西に檀紙神社ありしも今他に合祀せるを述べ、池の名をききて昔を偲ぶれば紙の浮くかと思ゆる薄らひ水あせていひも無けれど里人の口に傳ふる紙漉の池など詠んで村人の口碑を傳へてゐる。

備考

(一) 筆者は檀紙村に實地踏査を試みたるに、由佐次郎氏及び役場の方の見解に従へば、紙洗池は村の東北部紙漉部落にある現在のミチ池ならんと推定せられる。筆者は此のミチ池の南端より東へ香東川を渡渉して鷺田村へと探訪を試みたが、此の地方何として香東川の新流・舊流をはさんで淨願寺山及び紫雲山の南方は水流・地形より見て古來紙漉の最適地なりしことが肯みられるのである。檀紙の紙漉は中世に盛行せしためか、現存の地方誌料は殆んど皆無にちかく、此の點頗る遺憾であるがまたやむを得ない。

(二) 松平伯爵家執事上野昌平氏の語るところに従へば、檀紙村にて多く漉かれしものは、大高檀紙ならんと推定せられ、曾てその
 實物も見られし由、筆者にその所在分明次第通知の好意を寄せられる。

(1) 註

「日本紙業綜覧」藤原銀次郎氏序文一頁。三瓶孝子
 「本邦に於ける和紙業の發達」(「社會經濟史學」
 第十一卷六號)。日本經濟史辭典上巻、二七一頁

「皇學叢書」第一卷所收「日本書紀」三三八頁

(3)(2)

佐藤信淵「經濟要録」一五九頁(岩波文庫本 218-2)

(4)

濱田徳太郎「日本紙業發達史」三頁(「東京紙商同業
 組合史」所收)

(5)

同上、八頁

堀越登吉「紙の智識」五〇頁

(6)

「皇學叢書」第三卷所收「延喜式」五三〇頁

(7)

濱田徳太郎「日本紙業發達史」一五頁

(8)

「紙漉重寶記」の複刻本は製紙印刷研鑽會の分にて簡
 便に入手しうる。

(9)

「皇學叢書」第三卷「延喜式」五三〇頁

(10)

北海道拓殖銀行調査課「製紙」(道庁産業調査報告書
 第一輯)三頁。小野晃嗣「日本産業發達史の研究」

(11)

一六頁

(12)

和紙の起原と讃岐

(13)(12)

「古事類苑」文學部三、一一八六—七頁

(14)

吉田東伍「大日本地名辭書」第二卷、一二五九頁

(15)

平泉博士「中世に於ける社寺と社會との關係」二八一
 頁。「古事類苑」同、一一八八頁

(16)

小野晃嗣「日本産業發達史の研究」一六頁

(17)

大日本史料八編ノ廿、七三二頁、七五二頁

(18)

今川了俊(國史大辭典、一ノ二三—四頁)

(19)

今川貞世の事であり、左京亮及び伊豫守と稱じ、剃髪し
 て了俊と云つた。義詮に仕へて遠江の守護となつてゐる
 が、義満とも關係深く、和歌を好み、書畫を能くし、應
 永廿七年八月、年九十六才にて没してゐる。其の遺著に
 は、難太平記・落書抄・落書露顯・今川大双紙・九州合
 戰記・音塵抄・了俊壁書等がある。

(20)

編御記、建永元年四月條

(21)

小野晃嗣「日本産業發達史の研究」一三頁

(22)

小野氏は同著、四八頁に小高檀紙・大高檀紙の比較的研究
 早く史乘に見えたるものを擧げて次の如くしてゐる。
 小高檀紙「滿濟准后日記」正長二年正月十一日條。
 「薩戒記」永享五年九月廿一日條。

(23)

「滿濟准后日記」正長二年正月十一日條。

(24)

「薩戒記」永享五年九月廿一日條。

大高櫻紙：

「香閣御記」永享十年六月廿一日條。
「康富記」嘉吉二年十月一日條。

(25)

小野氏は前掲書四八頁に、「證如上人日記」天文六年四月廿九日の條を引用して、こゝに鷹紙と見えるのが、高を鷹と記せる最も早き例とし、『眞珠庵文書』三、天正八年十月廿一日付文書に「小鷹」、『鹿苑』錄「文祿三年正月廿四日、十一月十日の條に「大鷹

三、近世讃岐の和紙

雁皮の使用は室町、三極の使用は天明の頃よりと謂はれるのであるが、古事類苑にもある如く、鎌倉室町時代には戦亂相次ぎ、寧ろ一般には當時の斯かる平和産業はその發達を阻害せられ、紙は非常に缺乏したのである。徳川時代になると各國藩主は競つて、其の製漉に乗りだし、山陰の津和野・濱田を始め、山陽の廣島・岩國・徳山・山口・豊浦・清来、九州の臼杵、四國の大洲・吉田・宇和島・高知の諸藩は直接的購買獨占乃至領外移出獨占を行つたのである。斯くて、其の品質も頗る向上し、品種も増加して數百種に上つたのであるが、いま「經濟要録」に従へば、四國地方のみに就いて見るに、既に明和・安永の頃までに、土佐の奉書・杉原・仙遊・厚紙・半紙、伊豫の大洲半紙・奉書・杉原・丈長、阿波の大鷹・奉書・杉原・延紙・小半紙等の有名になれる史實を掲げてゐる。併し、遺憾ながら、讃岐の和紙は當時左程有名ではなかつたと見え信淵の經濟要録開闢中絶の經濟要録第十二の「五十年前迄ニ世ニ名ヲ得タル物産」の中に見出す事が出来ない。更に亦、民間に残る傳承と古記録を涉獵して見ても典據資料の甚だ尠いところから見ると、讃岐の和紙業再興は近世末から明治初期と斷ぜざるを得ない。⁴⁾而して此處には敘述の順序として近世に於ける紙漉一般の事實を述べて能ふ限り讃岐の和紙業に觸れてゆくことゝしよう。

紙」とあるのを初見とされる。

(26)

小野氏、前掲書一五頁、一六頁

(27)

中山城山原著、國譯本「全讀史」四九八頁

(28)

梶原竹軒「古今讃岐名勝圖繪」三三一頁

(29)

赤松景福「讃岐名所歌集」一三三頁

(30)

赤松景福「讃岐名所歌集」一三三頁

(31)

赤松景福「讃岐名所歌集」一三三頁

獨逸人ケムベルが元祿年間に記述せる日本の製紙法に據れば、「日本紙は眞楮の皮より製すること次記の如し」として「毎年日本曆十月（概して我十二月に相當す）葉の落つるを待ち、肥たる嫩條を刈取り、長さ三呎又は以下に切り揃へ、後ちに水と灰とを以て煮る爲め、之を束ね置くものとす。若し煮るに先だち乾燥せば、豫め二十四時間常水に浸さざるべからず。此束葉若干を集めて密着に纏り、堅に大釜に入れ、蓋を密閉し、然る後其皮が皺縮し、木の上部が約半時露出する迄煮る。斯くて各木條が充分煮熟するを待ち、之を釜より取出し、冷却する迄空氣に曝し、然る後堅に切目を入れ、皮を剥取り、木は不用物として放擲するも皮は乾かして鄭重に保存し、之を以て時に臨み紙を造る物質となす。」

とて、江戸初期の製紙の準備工作を敘し、更に材料の選別、灰汁中に於ける沸騰、攪拌、洗滌に就いて述べてゐる。而して此の洗滌に於ては特に大なる用意と判斷を要するものと力説し、「若し洗滌が餘り長期に亘らざれば、紙は實に強くして良き地質となるべけれども、紙質粗硬となり、價值少きものとなる。又若し其反對に出て、充分長時間洗滌を繼續せば、紙は實に白く仕上がるも、其質纖弱にして、且つ吸收力過度となり、筆記用に適せざるに至るべし。故に製紙上此部分の處理は、注意と判斷とを要すること多く、努めて過不足の兩極端を避け、常に中庸を得ざるべからず。斯くて充分丁寧に洗はるれば、平滑なる厚板の盤上に置き、堅きクスノキの棒を以て之を叩くに通常二人又は三人を以てす。……斯の如く楮皮を準備せば、米の豊富なる粘き糊及びオリネ（Orini オレニとあるはオリレンの訛誤にして、和名トロロアヒ、漢名黃蜀葵のことである。）の根より浸出したる同じく頗る粘滑なる糊と共に、一の狭き槽に投入す。此三物を混入せば、薄き清潔なる蘆（竹）を以て、適宜の状態に調和したる液體となるまで、充分に攪拌せざるべからず。之を作すには狭き槽を以て宜しとす。次に之を大なる槽に移す。日本語にて此槽をフイネ（船）と稱し、歐洲の紙漉工場に於て使用するものと多く異ならず。此槽より眞鍮製針金の代りに蘆葦（竹）にて製したる適度の型を以て二葉づゝ濾取るなり。此型をミイス（簾）と云ふ。今や紙葉を乾すに適當なる處置を執るの外、何事も残る所なし」とて、其の製法工作を概説し、併せて米糊の製造には亞細亞産中最も白くして最も肥へたる日本米を禮讃してゐる。

註一

(1) 黃蜀葵は長崎地方の方言では黃蓮アウレンと呼ぶがまさしく此のことであらう。和名をトロロ或は所によつてはニベ或はテホスケ(九州)と呼び夏月白花を咲き木の性質は楊柳木に似てゐる。栽培の土壤は砂地或は地味劣等なる所にてよろしく、肥料を多く要しない。「紙漉必要」にもある如く、古來何れの紙にも此のトロロを使用するのが、日本紙の西歐紙と異なる所以で、此のトロロの功用は紙の性を硬くし、艶を生じて佳良にする。更に詳しく言へば、此のネリを抄紙の際繊維液に使用すれば液の粘性を大にし長繊維の沈降並に接着鏈結を防ぎ、且竹簀上の濾水を調節し、抄造を容易にし紙質を均整にする。黃蜀葵の作り方に就ては「紙漉重寶記」には大豆・小豆を作る時候に等しとし、實は六角にして胡麻に似たり、虱に似たり、としてゐるが、その種は秋の末採り取め、翌春二月の末取出し、日に干し手にて揉み細に畝を作りて綿の種を蒔く如くに蒔付け、綿よりも粗く間引して綿と同じ様に肥水をなせば夏花を咲かせる。

(2) 中場技師の語るところに従へば、檢ネリの使用量については、氣温、原料その他種々の條件に左右されるといひ、半紙類なら冬季で纖維量一貫につき乾燥黃蜀葵の根五十匁内外がまづ標準量とされ、温かくなるに伴ひ三倍量まで増す必要があり、一般薄葉紙には多量のネリが必要であるといはれる。

(3) 小澤氏の研究によれば、粘質體はアラバン、ガラクタン、ペントガンより成るとせられるが、此の粘質體は液狀を呈し、皮部近い細胞の中に存在する。内部の細胞中には澱粉が存在し、ネリを採集する際根を壓搾すれば最初に粘汁は透明液として得られるが壓搾を繰り返すと澱粉が混入して白濁化する。澱粉の混入は上等紙には芳はしくないが、下等紙には差支ない。

黃蜀葵は畿岐では、小豆島及び安田村邊で産する。明治初期には備後邊から移入してゐたといはれる。

大藏永常は明和五年、豊後國田隈に生れたる有名なる農政學者であるが、和紙の古文獻に興味を有する史家は誰しも彼の稿本「紙漉必用」に着目する。彼はその裡に「紙を漉べき土地の見立」を大いに力説し、

紙を漉には山川の清き流れありて泥氣なく小石にて淺く滯りなく流るる川の淨地を佳しとす、又は清水の多く出て末はさらさら流るる地は宜し、○水温みて色に濁ある河は宜しからず、其所の水によりて紙の善惡あれば、先ツ水見立ること第一なり、○楮を晒すには淺き流の河なくては曝すること難し、袋洗ひとて能く叩きたる麻を河にて洗はざれば上紙には成り難し、依て清く流るる河を佳しとす。と謂ひ、清流の見立が紙漉に先決條件なるを擧げてゐる。

備考 讃岐和紙の發祥地、愛媛縣川之江邊の紙漉唄にも『船が出ますよ川之江港 積んだ荷物は紙ばかり 伊豫の川之江清水が湧くよ』

紙のよしあし水次第」といふのである。(日本紙業綜覧八七三頁)

「紙漉重寶記」(寛政¹⁰年)などにもその八丁「皮を漬置く圖」には

いざや紙を漉んと思ふ時朝より晚、晩方なれば朝まで水へ漬おき持かへりうす皮をすごき取なり

と示し、十二丁「楮字擲く圖」には

明日紙を漉んと思ふとき、前夜に楮字をあらひ翌朝よりたゞくに朝飯しかけ置きにへる間たゞけばよし

と記して微妙な製作技術を教へてゐるが、此處にも先づ豫備工作としての清水の揀定が問題となる。讃岐邊の手漉家の俗語を借りるも、水質悪ければ所謂トロがきかず、悪水を漉すにそれ丈生産費が嵩むといふ。元來和紙は植物纖維を水中で不規則に撈み合せて生じたるものを、水分を壓して乾燥したるもの、是非とも清水の力を借りなければ紙を形成することが出来ないのである。

楮を漂白するにしても水質悪ければ悪くなり、手漉にしても機械漉にしても、鐵分少き良き水質が問題となるが此の意味に於て水漬き郷東川の下流及び元郷東川の河底なりしと考へられる一線、鷺田―栗林公園―天神前八本松(舊師範學校)―四番町國民學校裏廣昌寺―九ツキを結ぶ線上、の鷺田、栗林公園南郊に於て、古來製紙業が發達し、今日も猶機械漉の殷盛さを觀ることは決して故なしとは爲し得ない。

備考 栗林公園附近の水質よき事に就いては、此の邊、もと郷東川の河底であり、此の支流を現郷東川に合せしめたと傳へられる西島八兵衛の事蹟を究めなければならぬ¹¹⁾。八兵衛は遠州濱松の人、生駒侯の依頼により、藤堂侯より顧問として高松に來り知行二千石にて仕へ、寛永年間藩内の土木事業に盡瘁しゐる。五年には満濃池を修築して田畑作物の枯死と人民の飢餓を救ひ、更に三谷池を築き、十二年神内池を築造、十四年には松島より新川に至る間の堤防を築いて海水を障へ福岡、木太、春日新開を作つてをり、かゝる事蹟は高松藩記に所載せられて居るが、更に「高松市史」に従ふと郷東川は「濱邊より約二里上流河邊郷(圓座口)にて二分し

てゐたもので、西側は現香東川である。本流即ち舊香東川は河邊郷より大體現在御坊川の流筋を流れ、鷺田村橋詰高丸出水を過ぎ紙漉を経て鷺田村萬藏羽上(小地名)の地に至りより數條に分れ、本流は前記羽上より北北東へ進み、栗林町前川の邊より北北西へ轉じた。此のため洪水等の時は、此より直進して氾濫し槻本神社は時々流失された。之より西堤を濫柿地藏、廣昌寺、大天神前、法泉寺とし、東堤を田町、南新町として數條に分れ時に變更しつゝ、四番町邊の海岸へ流入してゐたものである。』が『生駒親正の高松築城、城下町建設に當り、水流に苦心し、前記羽上より凡そ舊鷺川筋へ分流を造り、當時の市の境を東北流せしめ、東濱港に河水を流入せしめたのである。』としてをり、更に『四代高俊の世、西島八兵衛により現郷東川流に合一したのである』と結んでゐる。問題の核心は、西島八兵衛の此の工事に關する根本資料であるが、之に就ては遺憾ながら今日までのところ未だ發見されるに至つてゐない。

近世讃岐の和紙業の濫觴に就いては、各方面に其の探查を試みたるも、依然として資料に制約せられ、目下の處明確なる結論を下し得ない。一説に寛永二年伊豫川之江の人、香川郡鷺田村に來住して製紙業を創め奉書・杉原・美濃紙等の製法を傳へ、其の後弦打村へも川之江の人來り、斯業を開始したといふのであるが、其の開始年代に就いては遽かに信を措き難い。『高松藩記』に従ふと、五代頼恭公事略に僅かに『頼恭正徳元年五月二十日生、明和八年七月十八日忌日、意を殖産興業に留む、製紙陶造の業は、もと藩祖頼重、良工を四方より招致し之を創め、各々讃岐物産の一に居る、頼恭に及んで、益々保護獎勵を加へ、工師の養成に努め、其の業を盛んにす』¹²⁾とあるなら其の晩年、寶曆・明和の頃には高松藩の紙業は、伊豫・土佐には遅れたりといへ一應その素地を完成してゐたものと思はれる。高松市史にも『特に五代藩主頼恭は紙漉師を養成して紙漉地方で製紙させた』¹³⁾としてゐる。たゞ各方面の傳承口碑を綜合するに、伊豫三島・川之江方面より原料楮皮の苗と紙漉の技術が東漸移入せられた事はほゞ確實となる。『鷺田村誌』¹⁴⁾に傳へられる南部伊平の略傳には、

『南部伊平、後桃園天皇ノ安永年間、高松藩下館ノ家ニ生レ幼ヨリ奇才ニ富ム、身武門ノ出ナルニ係ラズ常ニ殖産興業ニ興味ヲ有セリ、壯ナルニ及ビ一日本村ニ來遊シ字紙漉ニ存セシ廣野出水、間作出水等ヨリ出ヅル清澄ナル水流ヲ見テ製紙事業ニ恰適ブルヲ知リ意ヲ決シテ武門ヲ捨テ其居ヲ現今ノ春日神社附近ニ遷シ製紙ノ技ニ長セシ職工龜遠トイフ者ヲ伊豫三島ヨリ雇傭シテ事業ニ着手シタリ。然ルニ

當時藩公所屬ノ鷹匠ヨリ南部ニ對シ製紙ノ原料ヲ晒白スル廣野間作ノ兩出水ハ鴨寄場ナルガ故ニ鷹ノ飼育ニ支障ヲ來スノミナラズ大ニ風致ヲモ害スレバ晒白場ヲ他郷ニ變更スベシトノ嚴命ニ接シタリ折角志シタル新事業モ之ガ爲ニ一頓挫ヲ來サシトセシガ奇智ニ長ケタル伊平ハ一策ヲ案ジ藩公ノ重臣タル某ニ説キテ水質ノ好良ナルヲ口實ニ松平家使用ノ大幕洗濯ヲ其ノ一手ニ引受ケタリ、蓋シ當時葵ノ紋所ニ對シテハ如何ナル者モ敬意ヲ表セザルヲ得ザル時代ナリシカバ洗ヒタル幕ヲ乾キスヲ稱シ出水ノ一邊ニ長ク吊シテ鷹匠等ノ口ヲ緘スル具トナシ其ノ陸ニ隠レテ盛ニ晒白作業ヲナシタリ流石ノ鷹匠モ之ニ敵シ能ハザリシトイフ。又或ル年多大ノ損失ヲ招キテ之ガ恢復ニ數年苦心シ或ハ販路ヲ擴張スル爲ニ單身近畿山陽ノ地ヲ巡ル等堅忍持久斯道ノ發展ニ努力シ終ニ本村ノ製紙業ガ今日ノ盛況ヲ呈スル基礎ヲ築キタリ。里人其ノ功績ヲ思ヒ相謀リテ一基ノ頌德碑ヲ作り伊平ガ建立シタル春日神社ノ境内ニ建設シ毎年祭祀ノ禮ヲ怠ラズ(備考)とあるが、鷺田村の北部潛水の流るゝ處、鴨寄の地に葵の紋章入の大幕乾燥場を設けるといふ南部氏の妙策は、寧ろ高松藩の斯業獎勵策として、徳川期に於ける他の諸藩のそれと共に是認さるべきあり勝な施策逸話であらう。

備考一) 春日神社は高松市紙町鷺田橋近くに在るが伊平の紀念碑を實地に就きて見るに表面に「紙業南部伊平君記念碑」とあり、裏面には「明治四十四年七月建、發企人いろは、岡野寅吉川西岩吉高橋金藏中山光治乃上美八安部梅八齊藤榮吉宮本寅條永春日瀬尾長四郎」諸氏の名が見える。

二) 南部家は現在の春日神社北側より北へ約一町、道路より西へ約一町の地點にあつたと謂はれるが、伊平の墓は字紙瀧杉浦利吉氏方の墓庭にあり、墓銘に「先祖代々、義光子清信女光月智清信女夏月宗德信女、」側面に南部氏とある。猶檀那寺は高松市野方町多聞寺であるとの事である。

いま杉山利一氏(高松市南新町)所藏文書によると15、次頁(二)に示されたる如く文政十年には既に紙商法所として巷間傳へられる仲間乃至會所の如きものが開設されてゐる。而して各商法開業の者には鑑札各々一枚づゝ下げ渡され金高に應じ、一步宛運の上銀を納めた様である。高松城下に於ける紙座の間は當初十八人なりしも明治三庚午年には一に示す如く十二人に減少してゐる。猶紙屋株の始源も、同家に所持する所謂鑑札のみに従ふも、文政十亥年五月にまで遡り得るであらう。

(一) 覺

一 正 月

一 二 月

一 三 月

一 四 月

一 五 月

一 六 月

右之通月番相定候事

午 正 月

(二) 覺

一 徳川御代文政十亥年紙商法所御取建相成右商法開業之者に著如左鑑札各壹枚鉤御渡被下買入金_二應シ壹歩宛之御還上收納仕來永
ク不異之基と相成夫々産業營居候處御一新之折柄去ル午十一月ヨリ御廢止ニ相成何邊も愁歎ニ及殆ト失其職哉ト深ク辛苦ヲ懷者不少
附而ハ右鑑札之寫副書等ヲ保全シ子々孫々至迄中間札所持之面々者一統無違背尙方今之御趣意ニ不悖様互ニ給助ヲ加ヘ和順專ニ堅
ク申合畢

明治四年辛未八月

元 座	升 田 座	加 賀 座	は り 座	小 川 座	車 座	伊 賀 座	木 村 座	須 賀 座	柏 野 座	大 塚 座	廣 田 座
正 藏	新 八	嘉 助	庄 兵衛	善 兵衛	卯 兵衛	長 左衛門	吉 兵衛	利 兵衛	傳 七	嘉 平	正 造

紙 座 本 印

本座

右二覺文書の後半は同時に又明治四年維新の經濟的變革に對處して紙座中間連中の隣組精神を發揮して相互扶助の誓を固めたるものと見られるが、既に幕末には栗林村に於て高橋三右衛門が瀋政用紙の製造を命ぜられるあり、栗林公園の南部附近現在の紙町一帯は維新當時には製造戸數五十戸を算したと謂はれる。手漉製紙場の分布跡から考へると明治初期の主産地は香川郡の北部・鷺田村・高松市西南・栗林町・田町・宮脇町と思へるが之等は殆ど現在の機械製紙工場の分布と其の軌を一にする¹⁶⁾。

四、明治初期の高松手漉

瀋政末に於ける手漉資料は、手漉より機械漉に移行せる明治末期より大正にかけて、其の殆んど大多數の手漉業者は機械漉に對抗して愈々慘憺たる敗北となり倒産したる事、及び反古紙として其の資料を漉き込み再生産に使用されたる等による爲か、今日では其の典據とし得る寫本類の探査は至難である。只巷間傳へられる業者の傳承を綜合するに、高松市内には四ヶ所に紙問屋を設け、讃岐紙全部を統一納めしめ、一ヶ月六回の市立を爲し、役員出張立會の上相場を定め検査の證印を押捺し且代金相當の税を徴して瀋の收入となし、瀋役人立會監督の下に取引が行はれたといはれるが、此の市立は維新後も猶存續し、明治十八年頃全く廢止せられ、其後は製造家は隨意に市内紙商に販賣し、紙商は更に縣下各地及び縣外と取引したるものにして、大阪と爲替取引の初めて行はれたるは明治二十二年、三年頃と謂はれる¹⁷⁾。此の期に於ける製産地帯を概観するに主産地は依然として高松市及隣接村であつて製品の種類は海紙・黄川表紙・半紙及機械漉障子紙(サイ)及び中抜紙と稱する白塵紙・雜用紙が主であつて他に少量の美濃紙・塵紙・傘紙・障子紙及藥水紙を生産してゐる。今初期に翻つて通觀するに、明治二・三年頃より先覺者中村喜大藏は鷺田に於て手漉の研究を創め、東田町の賽河原^{サイカハラ}にて藥紙を創作し、それより中ノ村^(現在の中野町)・室(坂)田^(方)の方へ手漉業が廣まつたと傳へられるが、茲に採取せる口碑を綜合す

るに中村氏は大工であり、多年濾器具の研究を爲し、最初半紙二十四枚取の簀笥を發明したるも過大に失して不便なりし爲め、明治八年之を折半して十二枚取の實用向となし、更に十五年十五枚取りに變更せりとの事である。

註 高橋政二翁より採集せる記録談に從へば 18、

(一) 中村氏の十五枚取濾器を擴めたるは明治十七年前後の事(高橋氏は十一年の創業であつて、當時は反古及び蘘を原料とし所謂蘘半紙を製造し、それより前は楮皮と反古とであつたと言ふ。宮脇町瀬詰忠次郎氏は既に以前より普通の小桁(高松地方では上桁といふ。)を以て製造しをり蘘半紙が不況となりし時には殆んど同質の「ナブキン」原紙を製造しつゝあり、之を神戸地方に移出し、更に一部では粗紙(俗稱、東洋紙等の生漉ものを製してゐた。木材パルプの使用は東洋紙製造の時代に創まり、後中抜紙にも二割内外混合したりしが漸次使用量増すに従ひ紙質柔軟となるに及んで蘘を混入するに至つた。かくてパルプ・蘘の混入によつて今の中抜紙となつたのであるが、元來讃岐の和紙は他地方伊豫・土佐・日向等の模造が多く、一例を言へば土佐の七九(當時美人印と云ひ高野あり)は鷺田村河野氏により、日向の「オビ盛」は瀬詰氏によつて參酌せられて當地方に作られ、殊に後者は材料全く楮皮なりしため本場物を凌駕したと言ふ。

(二) 高松地方獨特の濾器に就いて、高橋氏の説く所を聞くに、中村喜太藏製作の濾器は最初中棧五本にて簀の「ヒゴ」も極めて太く且馬毛二筋を繋ぎ合せて編みたるを以て其馬毛細き所簀の中央部に當り兩端より水洩れの著緩なるため極端に紙の兩端部厚くなり殆んど半圓形をなせる定木を當て斷截せし程なりしが、高橋氏は之が改良に苦心し、先づ馬毛を從來より反對に繋ぎ合せて幾分其を矯正したるも、更に後棧の數を八本に改め、簀を編むに絹糸を用ひることとなりしため再び紙の中央部薄くなる傾きを生じたるを以て氏は更に考究して濾器棧の中央部を幾分低く其桁全對に二分内外の勾配を付することを實施し、更に濾工の熟練の程度により桁を「ツルス」組の付け場所を加減する等漸くにして全紙均一なるを得るに至れりと。尙乾燥器の使用は大判濾器より遙かに七、八年後のことであつて最初は四角形又は六角形の中央に直接火を焚く裝置であつたと言ふ。

蘘の使用に就いては、中村氏は此の頃神戸にて石鹼工場を見、苛性曹達の蘘を溶解する性あるを知り、歸りて應用したと傳へられるが 19、すでに十三年から十四年にかけて此の方法を用ゐたる者他にも見られ、香川縣知事徳久恒範が明治三十年二月十六日、岡野恒三郎・鹽田百次郎・濱谷祐紀・小西駒吉・岩田完次五氏に與へたる表彰狀には

『(前略) 偶明、治十三、年、淡路、伊豫等ニ於テ、藥品ヲ以テ、薬ヲ煮製紙ノ原料ニ充ツルヲ聞キ、或ハ人ヲ派シ、或ハ自ラ實地ニ臨ミ、其方法ヲ探究スルモ、事秘密ニ屬シ、容易ニ其實ヲ得ス、歸リテ醫家或ハ藥舖ニ就キ、日夜探究、漸ク苛性曹達ナルコトヲ發見シ、又之ヲ試用スルニ至リテハ、其分量煮熟ノ度宜シキヲ得ス、屢々失敗ニ歸スルモ、更ニ屈セス、益協力ヲ堅クシ、熱心研究、遂ニ明治十四年、始メテ好結果ヲ得、爾來今日、盛況ヲ呈シ、縣下有數ノ一物産タルニ至レリ、其功勞木杯一組ヲ下賜ス』(傍點筆者)

とあつて、郷土産業發展の公的資料たりうるものであらう。斯くて、薬半紙は明治中期洋紙に壓倒せられ不況となる頃迄に逐次發展し、一時製造戸數二〇〇、月産八萬圓以上を産出輸出するに至つたと謂はれるが、今其の初期の手漉生成過程を覗ふに、大體の戸數は桑島安太郎氏の採集を中心に手漉家の諸説を綜合するに²⁾

1. 田 町、(二〇戸)

東田町の賽河原 六戸

最も早く起り附近一帯に廣まる。

田町の中央東部 六戸

田町と藤塚町との境界の川の東部 八戸

2. 中 野 町 (五十二、三戸)

西中野町 三十二、三戸

西中野町と言ふも多くは眞鍮製紙工場附近(二十戸餘)で、其の南部なら電車線路に至る間では全戸悉く紙漉をやつてゐたといふ。其のうち二十年前迄營業を續けてゐたのが十餘戸、其他小さいのが五、六戸あつた。更に栗林製紙工場附近にもあつたが、此の機械漉の登場に依つて打撃を受け姿を消した。四水電鐵公園前停留所附近の二軒も約十六・七年前まで續いたが、其の他は二十年前になくなつてゐたといふ。

東中野町 二十戸

三十年前の中野町は民家少く其の南部では九割迄紙漉を行つてゐたといふ。

3. 宮 脇 町 八戸

和紙の起原と讃岐

もとの高松製紙工場附近に瀬詰氏其他渡邊氏等が上柵を漉いたといふが、かゝる七、八軒の手漉製紙家は今は一軒もなく空地が多い。

4、栗林町 十戸

三十數年前の數であるが、昭和七年頃には猶藤本製紙工場の南側に一戸残つてゐたといふ。

5、紙漉 八、九戸計

昭和五、六年頃迄猶二、三の大手漉場が活動してゐたといはれるが今はもう一戸もない。

6、室附近 二戸 岡製紙附近 二戸

以上の如くであり、これは大體三十數年前の手漉が機械漉と角逐競争せる時代に廻り類推せる計數であるが、高松市内の約百戸、鷺田村の約百戸の手漉製紙は明治後期殊に日露戦争期の全盛期を契機として、大正初期より漸次機械漉に移行して行つた²²⁾。明治卅二年には讃岐製紙同業組合が設立せられ機械器具の改良、並に製法製品の研究の結果販路が擴張せられ、益々堅實な發展振を示したのであるが、三十七、八年日露戦争當時には製造家數も二百戸、職工數男女合計千八百と傳へられる。其の明治期に於ける製紙所の設立は、藤本製紙所（明治元年三月、栗林町）、高橋製紙所（明治十九年十一月、栗林町）、淺野製紙所（明治卅九年一月、中野町）等であるが²³⁾、此頃の産額の八割迄は塵紙であつて殘餘は仙花紙・半紙・障子紙等であつた。いま藤本製紙の濫觴について、同家に赴き探查するに、藩經濟史の研究上着目すべきは既に明治卅二年物故せられたる藤本幸三郎翁の存在である。氏は幕末高松藩の「御金藏」に二人扶持にて出仕したといふのであるが、松平家松ヶ枝舎の文書に従へば、「御金藏」とは藩營の庶民金融機關である。此のことに就てはまた項を改め、伯爵家の許諾を得て、學界に發表し度く思ふが、兎も角、藤本幸三郎は最初中野町に在り、幕末より維新にかけての經濟變革に處して藩も獎勵するところの紙業に轉換せるものと思はれる。斯くて永質良き郷東川の下流南岸にて楮を漂白し、傘紙・提灯紙等を漉き、栗林村に移りたる後も手漉を繼續し、機械を据え付けたるは比較的遅く昭和四年と謂はれてゐる。

註 松平家文書を拜見するに「御金藏」御貸付銀勘定帖に、寛政八辰年分「御金藏御貸付銀勘定帳」「表紙なき爲め九巳年分により類

推」より始まり享和元酉年分に至る五冊を寶藏せられてゐるが、之は要約すれば、御世帶方、士分、百姓、町人、藝人へ藩公の御慈悲により無利子乃至月壹割にて貸付けられたものである。今日學界の通説では諸侯名目金の貸付を行ひ得たるは唯徳川幕府の御三家たる水戸・尾張・紀伊の諸侯に限られてゐたとなつてゐるが、かゝる「御金藏」なる名稱を附して水戸藩と極めて關係深き高松藩が庶民金融に君臨せるは、學界に未發表の資料として注目されるべきところであらう。當研究室にその披見の便宜を與へられたる伯爵家に深く御禮を言上し度い。

次に勤王家であり同時に製紙業家であつた太田次郎の事蹟に觸れ度い。太田次郎は天保九年閏四月八日に生れ、明治二十九年七月十九日に歿してゐるが、勤王家小橋安藏の女婿であり、王事に盡瘁すると共に地方産業の開發に貢獻してゐる²⁴⁾。品川彌次郎より仕官を勧められたが固辭して受けず古高松揚小三郎等と養蠶業に力を致し、或は海軍救命具・燐寸製造具の工作に従事し、明治二十二年には香川郡鷺田村に日本製紙所(鷺田村字万藏七七に設け、紙漉長次などに其方法を研究せしめ、概一畝大の大形紙を漉き得る竹簾を考案してゐる)を設立、東京に出張所を設け、製圖複寫紙及び轉寫紙の漉出し考案に成功、之を海軍諸官衙特に海軍省・海軍兵器廠・横須賀鎮守府其他砲兵工廠・日本製鐵會社・川崎造船所・大阪鐵工所・山陽鐵道・工科大学等に納め、實用向のものとして好評を博したといはれる。

註

(1) 古事類苑、文學部第三冊、一一六七頁。日本紙業綜覽、一一一頁

(2) 堀江保藏「我國近世の專賣制度」藩營專賣制度一覽表

(3) 佐藤信淵「經濟要錄」一六〇頁(岩波本)

紙業綜覽(一一五頁)によれば、伊豫の宇和地方に於ては、天正年間松葉城主西園寺家の臣、土居太郎左衛門が野村安樂寺にて泉貨を漉いたといはれ、又大洲半紙に就いては、景

和紙の起原と讃岐

浦稚桃氏は其の著「伊豫史精義」七四二頁に、楮苗の原料は始め土佐に求めたりとし、寶曆年間より藩が積極的獎勵に力だし、楮役所が五十崎村に、紙役所が内子町に設けられ、製紙業が盛大となり大洲藩財源の主たる部を占めたといひ、近世土佐紙の濫觴に就いては、松好貞夫氏は「土佐藩經濟史研究」(三二六頁)に「天正・文祿の交、土佐安藝の城主備後守國虎の二男三郎左衛門家友が自家滅亡の後、土佐郡成山村で漉製したものが最初であつた」といふ。何れにしても讃

第十九卷 第一・二・三號

岐のそれより由緒が古いと思はれる。

- (4) 典據資料の鈔き理由としては、常盤産業の飯間氏の所見に従へば大正初期(四、五年より)讃岐の和紙業が手漉より機械漉工業へ移行の途次其の多くは倒産し、最後迄競争せし手漉業者は愈々慘憺たる敗北を喫せしこと、其他手漉業者に残りたる古記録が反古紙として漉き込まれし爲であらうと謂はれる。

- (5) 紙業雜誌第三十卷四號文藝及歴史欄「獨逸人ケムベルが元祿年間に記述したる日本の製紙法」參看(昭和十年六月號所載)

- (6) (7) (8) 大藏永常「紙漉必用」(王子製紙編「楮及楮紙考」七九—一四頁所收)。「紙漉重寶記」十二丁(製紙印刷研鑽會複製本)。西建男「和紙製造論」二卷三頁。今岡類「製紙の學理及實際」三〇一頁。堀越登吉「紙の智識」二五頁。香川縣工業試験場、中島技師談(大朝、昭和十二、五、十二)。

- (9) 大藏永常「紙漉必要」紙を漉べき土地の見立(王子製紙編、「楮及楮紙考」一〇〇頁)

- (10) 「紙漉重寶記」八丁、十二丁、(三省堂複製本)。紙業雜誌第二十卷四號十七頁。

- (11) 讃州府志、六五頁。西讃府志、二八六頁。高松藩記、五一頁。高松市史、四八頁。

- (12) 高松藩記、附錄五七頁。

高松市史、三五二頁。

- (13) 鷗尾國民學校所藏「鷺田村誌」歴史之部、人物傳、紙業南部伊平

- (14) 高松市南新町八二、杉山利一氏の三代前の祖は(一覺に見える筑前屋利平である。同家には猶安政七年白鳥神社への寄進文書其他二、三を所藏してあるが、杉山氏の骸に従へば、高松藩特有の紙としては山茶(椿)摺と稱して郷東川の下流に於て明治時代まで所謂仕上げの時椿の葉にて擦りしものがありし由、明治年代に於ては光本庄兵衛氏、同隣次氏、鷗見龜作氏等は之に關與されしとの事である。

- (15) 「手漉製紙場の分布跡と現在の機械製紙工場の分布圖」參看(桑島安太郎氏「香川縣地誌」中卷、第六十八圖)

- (16) 「香川縣機械製紙工業組合」が高橋政二氏より聽取採録せる文書による。いま、中野町元高橋製紙を經營せる舊家に赴きて探査するに高橋政二氏は慶應三年十二月二十九日生にて昭和十二年二月、七十二歳の高齡にて卒せられてゐる。漉器工作の技術に堪能なりし由であるが、其の技術は親戚伊豫に在りため、其の方面より移入せる事がほゞ確實となつた。

- (17) 香川縣史舊版一六頁

- (18) 香川縣知事正五位勳四等徳久恒範が明治三十年二月十六日本文五氏の産業功勞を表彰して木杯一組を與へたる表彰狀寫による。

(21) 桑島安太郎「香川縣地誌」中巻一八二頁

(22) 手漉製紙の全盛期は明治卅八年及び大正八年頃であつて、日清の役、日露戦争、歐洲大戰など戦争と頗る關係が深い。歐洲大戰當時の好況は今猶耳新しく巷間に傳へられるところである。(香川縣、綜合郷土研究四一九頁第一八五圖參看)

(23) 高松市史三五三頁。藤本製紙の創業は高松市史に従ふ

五、餘論、製紙技術の發展概観

今製紙方法の發展を概観するに、明治六年山本秀夫の遺稿「製紙一覽」には「凡そ草木の外皮に纖維を具ふるものは、大抵紙を製すべし、然れども古來楮、雁皮、三股の三品を以て専ら是を製す、就中楮を第一とす、雁皮之に亞ぐ、三股又之に亞ぐ」としてゐるが、讃岐手漉に於ては此等原料の外に早くより桑皮・薬・反古等を用ひ、此等の纖維を整理後草木灰又は生石灰を加へて煮沸し(明治初期の技工は大體楮・桑皮・薬・反古等を用ひ、一晝夜置いて臼又は打盤にて叩き川水にて漂し、木製の船に入れ、此間トロを使用してゐる。註二)

註一 トロは多く備後埼玉方面より移入したと言はれるが、良質の紙は、姫路阿波方面のタヅ、劣等紙にはニラ又は青桐の花を用ゐたと傳へられる。

かくて船内で半紙或は奉書等夫々に大ききの形の漉機を手持つて、一定量の原料を掬ひ上げ、漉機を動かしつゝ水を漉し、漉機上に纖維を残して抄紙するものであるが、現在の如く大判に漉き上げて所要の大きさに切斷したものではなく、全部裏表板張にして天日乾燥を行つた。其後一般に原料纖維の粉碎にも叩解機が用ゐられ、乾燥も熱湯利用の乾燥機を使

と、明治元年三月とあるが、藤本民三郎氏の意見では、同家の創業は天保元年三月であるといふ。別に典據資料を示された譯ではないが、最初中野町に在つて傘紙等を漉いたが、其後栗林村に移つたと謂はれる。若し開始が天保元年三月であるとすれば、同家の創業は恐らく先代幸三郎ではなく其の先々代とならう。

(24) 鎌田共濟會調査部編「小橋安藏一門勲王史」六二頁。

用して生産能率を高める事となつたが、大正時代に入ると急速に機械漉に進展する。尤も現在と雖も手漉も立派に存続し、香川縣手漉工業組合(組合長、中村藤藏氏)では市川製紙(高尾・山地市)・日新國產製紙(舊高橋製紙)・池田製紙の三を有してゐる。而して優秀なる技工は亦轉業すれば國內特殊産業に貢獻するの外、南方共榮國內の豊富なる植物纖維を利用して、土民に手漉技術を教へる指導的立場も約束されてゐる。いま同工業組合の調査によるに、十數年前と雖も中技紙八七二俵、團扇紙九六三貫五百匁、傘紙五〇萬七百枚、障子紙百間八〇締、溫床紙八萬壹千枚の産額をあげてゐる。

製紙機械としての抄紙機には大別長網式と圓網式の二種類あり、兩者の操作は漉網部以外の壓搾部・乾燥部・光澤部・巻取部に於ては殆んど變らない。長網式は長き漉網を有し、吸引筐(サクシヨン・ボックス)を備へて紙料の脫水を助け、振動裝置を設けて纖維を撈み合し、紙面の均整、速度を自由に調節して紙質を變化せしむる等、技術の應用範圍が廣いが、圓網式は横造簡單にして、長網式の如く高速運轉に適せず、然も漉網が圓筒型となり、振動裝置もなく、紙料纖維が漉網の動く方面にのみ配列され、縦に強く横に弱い紙が出来たる等の缺點を含んでゐる。併し乍ら、機械漉和紙の抄造に於ては、纖維の一方に並ぶことを問題としないこと、竹製漉簀を金屬製漉網に代用し得ること及び建設費・作業費等の低廉なること等の理由よりして讃岐地方のみならず内地では多く圓網式が採用されてゐるやうである。その讃岐地方の製紙原料は三桮皮、楮皮、雁皮、皮、マニラ麻、バルブ、反古、葎、桑皮等の纖維竝に苛性ソーダ、漂白粉が主なるものであつて、最近に至り常盤産業(註)の如きは香川・岡山・徳島諸縣の赤松を材料としてバルブの自給産産をはかつてゐる。今機械漉の方法を概観せんに、先づ諸種の纖維は紙の性質に應じて適當に配合し叩解機にかけて適當に疏解裁斷する。次に叩解漂白された原料纖維にサイズ填料等を混合して抄紙機にかけて紙に抄造する。抄紙機の要部は、一定方向に遠動する無端の金網と加熱ロールとから出来て居り、粥狀にした原料液は金網上に流し出されると、水は直ちに濾され纖維は絡み合つて金網上に残るのである。之を更にロールの間を通過させ水を絞り布の上に移し、加熱ロールによつて乾燥する仕掛となつ

てゐる。

註二、常盤産業株式会社（昭和十八年六月五日登記）現社長國東照太氏、資本金二百萬圓、現在和紙・塵紙・仙貨紙・石州紙・薄葉紙・障子紙・バルブ紙・温床紙等を製造してゐるが、同社「経歴書」に従へば、大正初期公園北門前に機械製紙を初め、大正十一年二月鷺田の萬藏に常盤製紙所を起し、昭和七年に大川郡津田に大東製紙所を設立、十八年六月には常盤製紙を中核として、津田の大東・松本兩製紙を合併、更に高松市の小川・松下兩製紙を合併、大阪府の樽井製紙・伊塚紙と合併してゐる。